

救えミャンマー難民

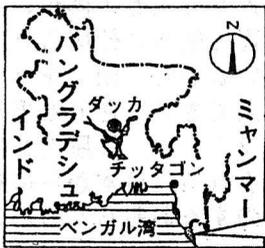
福岡出身医師の卵 頑張る

ミャンマー(旧ビルマ)の軍事政権に耐えきれず、隣国バングラデシュに流れ込んだミャンマー難民の国際救援隊で一人の日本人ボランティアが活躍している。日本を含むアジア十三カ国の医師らでつくる非政府組織(NGO)、「アジ

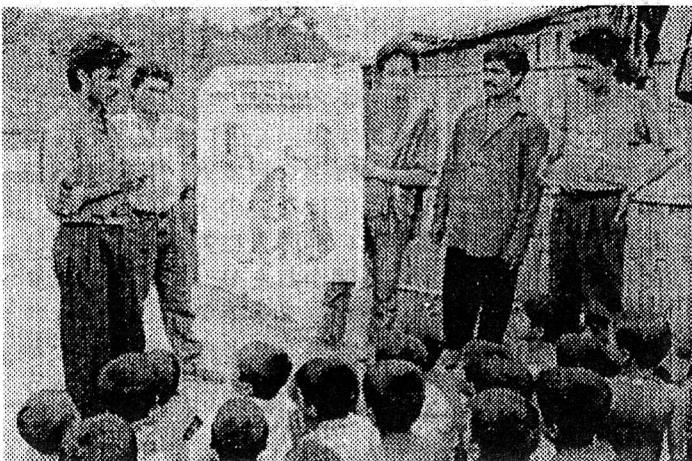
ア医師連絡協議会(AMDA)の岩永資隆さん(三〇)福岡県出身。「欧米から二千人以上が救援に駆けつけている。日本人は私一人だけ。もっと関心を持ってもらえたら」と、新たな難民への救援を訴えている。岩永さんは福岡大医学部

を卒業、医師国家試験の準備中だが、AMDAがバングラデシュ人医師を中心に組織した緊急救援チームに参加。先月末のキャンプ入り後は、医師のアシスタントに従事する一方、衛生知識の乏しい難民に「トイレの後は手を洗おう」「川や池の水を飲まないように」など衛生教育にも力を注い

ミャンマー難民のキャンプが集まる地域



ミャンマー難民の子どもたちに衛生指導をする岩永資隆さん(中央)



でいる。

難民は大部分がイスラム教徒の少数民族、ロヒンギヤ族で、ミャンマー西部に住んでいたが、ミャンマー軍の展開で家を追われた。昨年暮れから急増し、現在、

バングラデシュ最南端の十九のキャンプに約二十七万人が収容され、雨期の豪雨と病魔にさらされている。

こうした難民の救援活動は、二千人を超える欧米のボランティアと、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)の手で行われ、一週間で一人当たり米五〇〇g、豆六〇g、塩五g、油二〇mlが配給される。

当面、飢えに陥ることはないとされているが、キャンプの半数を占める子供の栄養補給にまで手が回らず、岩永さんが知り合った十五歳の少年は身長が一二〇cm足らずだった。また、衛生状態も極めて悪いとい

う。バングラデシュはもともと世界最貧国の一つ。難民を抱える余裕はないが、難民は「今のミャンマー政府は信用できない」として帰

還を拒んでおり、当分の間、現状が続きそう。このため岩永さんは「日本がアジアのリーダーを自任するなら、こうした人々の現実にももっと関心をして話した。